

南北戦争期の女性とその政治文化

——研究の現状と展望——

田 中 きく代

は じ め に

南北戦争研究の重鎮であったディビッド・ドナルドが、アメリカ合衆国史研究において「南北戦争史の因果関係を問う研究は死滅する」と危惧したように [Donald], 『ルーツ』が一般の人気を博していたのに反して、1970年代になると南北戦争そのものの研究は少なくなり、歴史的使命を終えたとみられがちであった。しかし、新リヴィジョニストの研究を基盤に、女性史の興隆と社会史の台頭によって、家族史、労働史、コミュニティの歴史、都市史などの分野で豊富な研究が生まれ、南北戦争とその前後の時代の社会的多様性が明らかにされるようになった。とりわけ、多文化主義の影響を受けて、ジェンダー史の可能性が広がったが、本稿では、そうした研究動向と今後の展望を記すことで、南北戦争に関わった女性のより多面的な諸相を明示し、それらを家族、コミュニティ、国家と絡めながら、より広い視座から新たな南北戦争像を描く一助としたい。

さて、150年を経て南北戦争を振り返るとき、現在の南北戦争研究の課題には大きく二つある。一つは、フォナーが主張するように、南北戦争前後の時代における広義の権力がいかに生まれ、概念化されたかについて [Foner, 1980], もう一つは、フォルミサーノが主張するように、当時十分な市民権を持たなかったマイノリティの人々にも光をあてることである [Formisano, 1999, 93–120]。ジェンダー史の視点からの南北戦争研究も、この二つの課題

に答えなければならないが、例えば、女性たちの連帯による慈善や社会改革などが、いかに南北戦争を契機に変容し、官僚化し、組織化されていったのか。また、マイノリティとしての女性の問題を、いかに人種の問題、民族の問題と交錯させて提示することができるかが問われる。本稿でも、南北戦争に参加した市井の女性を確認し、彼女たちの連帯の活動が、19世紀の全体の歴史のなかで、いかなる意味を持つのかを考えたい。

I 女性史から見る南北戦争研究

ジェンダー史の可能性

ジュディス・ギーズバーグは、2000年に刊行した著書 *Civil War Sisterhood* の序章で、女性史で19世紀の女性の公的活動は重視されてきたが、19世紀初頭の第二次覚醒運動による道徳的な社会改革と、再建後のキリスト教禁酒同盟のような政治化された女性の活動のみが注目され、その間の南北戦争の時期の女性の活動は無視されがちであったと述べている [Giesberg, 2000]。奴隷制廃止の懸案を最優先することで、女性の選挙権を求める運動が自重されたとか、現実の戦争への対応のために女性の問題は先延ばしにされたといった単純な説明がその理由とされてきたが、彼女は、前後の時代と関係付けながら、南北戦争を中心に置く女性の検証をしなければならないと主張しているのである。

もっとも、これは、南北戦争史を再考するには女性史、ジェンダー史が大きな可能性を秘めていることを指摘するものである。従来の南北戦争研究全般が因果関係を求めるあまりに、戦争時の研究を軽視する傾向があったこと、社会史の精緻な研究では、特定の地域や特定の時代を超えて、長期的スパンで見ることに限界があることから、それらの制約限界を打破するために、女性史、ジェンダー史に期待するものである。

ここでは、女性の南北戦争への参加という視点から検証してみたいが、歴史学の研究で南北戦争中の女性の活動が僅かながらも出始めるのは1960年代に

入ってからである。そうした中で、マッシーの *Bonnet Brigades* は古典的なもので [Massey, 1966], 男性が戦争に取られたために女性の社会進出が果たされたことが強調される。社会史・文化史的な研究を重視する今日では、この研究は一面的で限定的という批判は免れえないが、当時としては画期的で多くの史家に影響を与えた。

1970年代には、南北戦争史もまた、社会史の影響を受けることになった。こうした社会や文化の次元に分け入る研究では、市井の人々の行動やアイデンティティに目が向けられたが、一般の女性の存在にも徐々に光が当てられ始めた。戦時下の庶民や兵士に焦点を置いたベル・ワイリーの、*Common Soldier of the Civil War* [Wiley, 1973], ランドール・ジマーソンの *The Private Civil War*, リード・ミッチェルの *Civil War Soldiers*, フィリップ・パルードンの “*The People’s Contest*”, ジェイムズ・ロバートソンの *Soldiers Blue and Gray* などは、一般の男性を対象とするものであったが [Jimmerson ; Mitchell ; Paludan ; Robertson], 随所に一般の女性に関する記述も散見できる。また、社会史の必要性を説いたヴィノヴスキの論文集が得がたいが、中でも女性に関してはゴールマンの “*Voluntarism in Wartime*” が貴重で、フィラデルフィアの大博覧会を契機に、女性によるコミュニティを超えた大規模なバザーや募金活動が実施され、慈善の組織化や中央化が進んだことが指摘されている [Goalman in Vinovskis]。

***Divided Houses* の発刊**

同時期から女性史にも変化が表れ始めた。市井の女性たちの様々なレベルでの社会運動に目が向けられ、従来の女性史や社会史のフレームワークを超えるジェンダー史のアプローチも見いだせるようになった。そうした地道な研究の集成が、1990年代の初頭に出版されたクリントンとシルバー編纂の *Divided Houses : Gender and Civil War* であり [Clinton, Silber, 1992], その後の南北戦争期におけるジェンダー史研究の牽引役となった。南北戦争期の研究の重鎮であるマクファーソンの序言によると [James M. McPherson in

Clinton, Silber, 1992], この本は、女性は、男性と両性の子どもを含む世界との関係の上に存在しているという認識で書かれている。18の論文のうち、7つが女性に関するもの、4つが男性とマスキュリティの概念に関するもの、7つがジェンダーと家族の問題を捉えるものである。また、それらのうちいくつかは主として人種関係、人種意識を問うもので、その他は主としてジェンダーと同時に階級の問題を扱うものである。さらに、7つは北部を、9つは南部を扱っている。重要なことは、すべての論文が、男性と女性と子ども、黒人と白人、エリートと一般の人々の経験を、南北戦争と言う凄まじい経験、すなわち多くの人々を殺傷し、黒人を解放し、残りの2700万人の考え方や社会関係を大きく変化させた経験に関係付けていることだとしている。

Divided Houses の後15年を経てクリントンとシルバーは *Battle Scars* を編纂しているが、その序文でシルバーは過去15年間に、南北戦争期を捉えるジェンダー史の進展は著しく、多くの研究が生まれ、様々な史料が発掘されたことを誇らしげに語っている [Clinton, Silber, 2006]。また、最近のジェンダー史は、男女の行動を形作る文化的イデオロギー的体系と、南北戦争と性の役割に関するより広いフレームワークの間の相互関係に焦点を当てるようになり、ジェンダーがアメリカ史上でいかなる文化的構築をなしてきたか、いかにその構築が、社会、政治そして、軍事的風土にさえも影響を与えたかを考えたいと述べてもいる。*Battle Scars* では、南北戦争前のセクション対立と奴隷解放の時代を、黒人と白人のアボリショニストのマスキュリニティの概念、南部におけるカトリックの尼僧の役割、再建期の性的暴力などから考察する論稿が載せられている。

その他に、クリントンの単著 *The Other Civil War* も画期的で [Clinton, 1999], 南北戦争時の様々な女性に焦点をあてて、女性の連帯やネットワークにも関心を寄せている。シルバーには、新たな比較の方法を試みたものに、Richards Civil War Center での招聘講演 *Gender and Sectional Conflict* [Silber, 2008] もある。南北の人々のマスキュリニティとフェミニティのイデオロギー的構築を比較して、それらが南北戦争への参加者の経験を方向づけ

たとえ、例えば、特に女性の場合は、愛国心は北部では政治的な位置を求めるものだったのに対し、南部では血縁への忠誠心に基づいていたこと、また、北部の女性が、勇敢な厳しい経験を忘れがちなのに対し、南部の女性が記憶の中にそれを長くとどめていることなどを比較・検証している。

かくして、ジェンダー史は、*Divided Houses* 以降、取り上げるテーマが広がり、その方法論も洗練されてきた。白人女性に関する研究では、一般に北部研究の方が多いが、北部女性に関しては、アッティの、*Patriotic Toil* [Attie]、シルバーの *Daughters of the Union* [Silber, 2005]、ギーズバークの *Army at Home* [Giesberg, 2009] がある。今後は南部の女性の研究がさらに多面的になされなければならないが、先行研究ではラブルの *Civil Wars* [Rable]、ワイナーの *Mistresses and Slaves* [Weiner]、ファウストの *Mother of Inventions South* [Faust]、オットの *Confederate Daughters* [Ott]、ホワイトの *The Civil War as a Crisis in Gender* [White]、エドワーズの *Scarlett Doesn't Live Here Anymore* [Edwards] がある。

白人女性に比べると数は少ないが、北部の黒人女性の研究は比較的多い。北部の自由黒人の女性は、南北戦争前は奴隷制廃止運動や地域の改革運動をしていたが、南北戦争時は、看護師、料理人、洗濯人として従軍したり、奴隷解放後の南部へカーペットバッガーとして解放人局と連携して教育などの救済活動をしている。地下鉄道の車掌として知られるタブマンは、南北戦争中はスパイをしたり、看護師をしたりしている。

南部の黒人女性の研究では、奴隷や解放人に関しては、*Divided Houses* などにも論稿があるが、ハンターの、*To 'Joy My Freedom* [Hunter]、フランクウェルの *Freedom's Women* [Frankwell] が得難い。また、テイラーの *Reminiscences of My Life in Camp* は、元奴隷の女性の 1902 年の備忘録である [Taylor]。同じく解放黒人の教育のために教師として南部に行った白人女性サラ・J・フォスターの日記や手紙をもとに、当時を再構成したレイリーの著作にも人種問題が浮かび上がる [Reilly]。また、解放人局の研究を通して、人種やジェンダーの問題を読み解こうとするものにファルメルカイザーの

著作がある [FarmerKaiser]。

移民女性やエスニシティに関するものは比較的少ないが、アイルランド系移民やドイツ系移民たちは義勇軍として従軍しているものであり、今後は移民女性の存在をも探しだされるべきであろう。さらにカトリック系に関して、シスター・マヘールの看護活動に関する研究は先駆的なものである [Maher]。 *Battle Scar* にも、尼僧の話題が取り上げてあるのは先に述べたとおりである [Virginia Gould in Clinton, Silber, 2006]。

リテラシーの公開性―日記や手紙―

史料の発掘も進み、南北戦争時の一般の女性の手紙や日記やメモワール類が多く出版されている。アイセンバーグは日常を手紙や日記に書くことは祈りのようなもので、中産階級の女性にとっては自己主張の手段であったと指摘しているが [Isenberg]、南北戦争という危機の時には、通常以上に手紙が書かれ、日々の出来事も日記に記されている。戦地にいる夫や父親、婚約者などとの連絡による個人的なものが多いが、それらから女性の置かれていた状況や、南北戦争への思いが一枚岩ではないことが分かる。

戦地となった境界諸州では、それに巻き込まれる女性の複雑な有り様が語られるものが多い。フランシス・ペーターの日記 *A Union Woman* は、北軍の従軍医師である夫を気遣う若妻が、病気がちである自身の不安とともに、北軍の正義を信じる強い忠誠心を綴ったもので、南軍のレキシントン占拠から両軍の対決、奴隷解放宣言の頃までのケンタッキー州の様相が語られる [Smith, Cooper]。同じく、ケンタッキー州のアンダーウッドの日記 *Josie Underwood's Civil War Diary* は [Baird]、父が奴隷所有者で政治家であった娘ジョシーが、北軍への共感から、南部連合のジブラルタルとされた軍司令部ボーリング・グリーンでの南軍の暴挙を批判し、境界諸州で、家族、友人、コミュニティが二つに引き裂かれた悲劇を描いている。

南部では、ルイジアナ州で大プランテーションを経営する未亡人ケイト・ストーンの日記 *The Journal* が、北軍の到来、奴隷のことなど、南部の運命を

客観的に描き、「女性が待つだけの存在」であったことへの憤り、祖国南部連合への愛、運命の受容などの感情が合い混じって語られる [Anderson]。また、ヴァージニア州のマーガレット・C・ラウボロウの *The Recollections* は、夫が出征中の出来事、すなわち仕事、インフレ、食糧不足、子ども、南部人のプライドなどを綴る回想録である [Johnson]。彼女は首都リッチモンドで職を得て、時折夫に会える方法を得るような、南部の新しい女性であるが、南部の男性たちが戦争を正義の戦争としているのに対して、男たちが病院で死亡したり、負傷したりする南部の現実を正視している。

さらに、一般の普通の女性にも光が当てられる。ヴァージニアのウィンチェスター在住の主婦コーネリア・P・マクドナルドによる *A Woman's Civil War* は、従軍する夫が残す妻を心配し、出来事を詳細に記述し、彼に連絡することを彼女に約束させたものである。プランテーション経営の才能がなかったとされる女主人のこの日記は、家という枠組みの中だけで語られるものであるが、行間に南部の女性の複雑な感情が垣間見える。彼女は北軍支持に転じた家内奴隷の子どもの行く末を案じたりして、女主人と奴隷のかつての親密な関係を推測できるところもある [Gwin]。

II 女性の連帯の変容

19世紀の女性の連帯

19世紀を見渡す時、夥しい連帯の活動が様々な次元で行われたことが特徴的であるが、これはアメリカが植民地時代以来のジェントリ的共同体から、新たな「社会的コミュニティ」と名付けうるコミュニティに再編される過程で [Wiebe]、人々がこのコミュニティに新たな帰属意識を求めようとしたことにある。連帯活動は老若男女に関わらず行われたが、女性の連帯の場合、禁酒主義や教育改革のような社会改革運動、孤児院・救貧院活動などの慈善活動の他に、日常的には祈りの会、読書クラブ、裁縫の会などがある。それらは、ヴィクトリア朝的家族観に基づく女性の絆、姉妹の絆を強調する道徳的な改革の運

動として始まったが、「自由」の基盤である「家」と「外界」(world)との間に生み出された、「家」の集合としての we [私たち] の世界、すなわち「世間」(society)、「仲間の空間」を作りだしたことに特色がある。

この連帯の注目点をまとめておくと、4点ある。第1に、女性の連帯の政治性がある。「世間」は公的領域と私的領域が絡み合っている空間で、そこで繰り広げられる女性の連帯運動には公的なものと私的なものが混在している。アイゼンバーグは、このことが、女性の連帯運動の公的性格を不明瞭にし、政治性に欠けるとされたが、連帯を通して新たなコミュニティ作りをするプロセスで、女性たちが公共善を実行するモラルの具現者として活躍したことは、むしろ政治的であったのではないか [Isenberg]。例えば、女性の請願運動にみるコミュニティの改革運動は、福音主義的な枠組みに規制されてはいても、私的なものではないと強調している。

第2に、「国民形成」の過程で、女性がどのように国家や社会と結び付けられて行ったか。コットは結婚を通して、キリスト教による一夫一婦制に基づく、男女の合意による関係を理想とするモデルが提唱されたと述べている [Cott, 2000]。それは夫を妻に優越する存在とする社会秩序を意図し、投票権という国民としての資格を、自由人としての家長である夫、すなわち「家」、[家庭]を所有するものに与えるという国家的秩序を意図したものであった。女性の連帯運動は、第1の点のように独自の女性の政治文化を生み出したが、それはこうした国家的な装置からは完全には自由ではなかったことも理解すべきである。

第3に、コットは、また、ヴィクトリア朝的家族像を理想視する結婚観が、下の階級の同化を促すとともに、人種や階級差を広げたことを強調していて、適切な結婚という「世間」の規範は、「外界」の者を、不道德な隷属する悪徳の存在であると劣等視する役割を果たしたと指摘する [Cott, 2000]。移民や労働者階級の家庭を、自己規制の欠如、暴力と貧困の充満の場と捉え、女性が外で働く、公的領域と私的領域の区別が無い家庭を蔑視する差別意識は、女性の連帯が内包していたブルジョワ的な白人の優越意識によるもので、西部への

地理的拡大によってより多くの異人種の人々と関係するようになると、排外的な 19 世紀的アメリカニズムを生み出すことになった [Morrison ; Saxton]。

第 4 に、さりとて、中産階級の女性と、一般の女性、労働者階級の女性との関係に親和性あったことも指摘される。ナンシー・フレーザーは、「世間」の領域では、女性の多様な公共圏が階層的に重なりあっていただけとすると、中産階級の女性たち、一般の女性たち、労働者の女性たちはそれぞれの「世間」に基づく公共圏を作りだしていた [Nancy Fraser in Calhoun]。ライアンが述べるように [Ryan, 1979]、それぞれの公共圏は階級的に明確に切り分けられる面も強かったが、連帯の相互の活動は、副次的な存在としての女性という共通意識を涵養する面もあり、相互の公共圏の間に親和性があったとしている。

南北戦争と女性の連帯

さて、南北戦争は女性の連帯にどのように影響を与えたのか。以上の 4 つの点を踏まえて考えてみたい。ギーズブルクは、先述のようにこの時代を “missing link” と捉えて注目し、南北戦争の時に設置された衛生委員会 Sanitary Commission の分析をしている。彼女の研究自体は、南北戦争時から再建期以降の連帯への転換に主眼があるが、いかに慈善における女性の絆、姉妹の絆が地域的なものから全国社会へと組織化されていくか、またそれに女性たちはどう対応したのかを見出そうとしている。

衛生委員会とは、1861 年の夏に連邦政府によって設置された兵士への物資の援助組織である。南北戦争が始まると、従来の連帯運動によるローカルな慈善活動のネットワークによって、自発的に北部で 7000 支部を有する兵士援助協会が生み出された。政府は、この援助協会を衛生委員会の下部組織に取り込むことで、援助ネットワークを北部全域的なものに広げ、大量の物資や人的援助を効率的に戦地に送ることを可能とした。

衛生委員会の先駆的な研究では、南北戦争後も南北戦争前から維持された連帯の人道主義的な面があったことが強調されるものに *Lincoln's Fifth Wheel* があり、現在でも価値ある研究である [Maxwell]。しかし、これとは反対に

慈善組織の変容を解く研究は多い。例えば、衛生委員会が援助を適切になすには、専門的な知識、効率性などが求められるようになったが、それは衛生委員会を通して官僚制に次第に取り込まれることを意味していた。そうした新たな組織で政治的発言が求められたのは従来の奉仕的な女性ではなく、仕事として援助活動をするエリートの女性であったというような研究が生まれた。そして、南北戦争時に登場した第二世代の若い女性指導者の多くは、南北戦争を、女性の草の根の活動を組織して中央権力に接近する好機だと考え、道德改革による間接的な政治性ではなく、具体的な現実の政治的解決への道を求める者たちであったとされた。

フレデリックソンの *The Inner Civil War* では [Fredrickson]、委員会の設置は、慈善が個人の人道主義ではなく、男女の中産階級のエリートによって、階級的要求を労働者階級に求める保守的な試みであり、官僚主義のエートスの表れであったという見解を紹介している。フレデリックソンは性差について直接的には触れていないが、性差を加えてまとめると、1830年代にはヴィクトリア朝的な独特の女性の領域に基づくことで、エリート、中産階級、一部の労働者階級の女性は伴に、階級横断的な姉妹の絆を広げ、禁酒主義のような運動で男性社会を作り変えようとした。しかし、南北戦争中あるいは戦争後に、女性改革者のエリートは従来の姉妹の絆を捨て、より保守的な階級的慈善に転換したということになる。つまり、従来の慈善は周辺化され、女性の慈善組織は組織化されて、その中枢は男性にとって代わられた。女性の連帯は中産階級的都市的なものに特化し、男性と女性、ブルジョワと下層階級の間の、「服従の儀式」が始まったというテーゼを描くことになる。

ギーズバークも、新しい女性たちが地域のヴォランティア的な物資の調達能力をナショナリズムの構築に利用したということを、同様に大枠としては認めていて、南北戦争はエリート女性の政治参加における大きな転換点であったと主張する。しかし、彼女は同時に、中央集権化や専門主義の圧力に対して、地域の女性たちの中には、委員会に反抗し他の方法で前線に物資を送ろうとする者も多くいたとするアッティの見解をも重視している [Attie]。地域の女性た

ちの抵抗によって中央化はそれほど簡単には進まなかったことは、従来の道徳的な社会改革運動時の手順、ネットワーク、意識などが、過渡期に特有の両義的な面があるものの、少なくとも末端では消滅したわけではなかったのである。さらに、衛生局の評議会は男性に占められていたものの、女性看護師の統括官として任命されたドロシー・ディックスのもとで、女性が実質的な仕事を担ったことも証明している。例えば、ルイザ・スカイラー、アビゲイル・メイ、メアリー・リバモアなどの看護師の指導者の分析を通して、女性がそれほど簡単に地位を明け渡さなかったことが分析されている。

Ⅲ 戦地に赴いた女性たち－看護師と兵士を中心に－

南北戦争直前の時代になると、連帯の活動を通して、女性は集団としては外界と接触できるようになった。日常の改革運動の他に、西方へ派遣された女性教師、西方に出かけた孤児列車の女性エージェントなど、社会改革や慈善を通して長距離の移動をするものが出てきた。奴隷制廃止運動の地下鉄道の車掌もそうである。南北戦争は、こうした連帯活動の空間的移動の範囲をさらに広げたのみならず、北部からも南部からも戦争に従軍する女性をも多数生み出した。戦地に赴いた女性たちには、医師、看護師、料理人、洗濯人、そして兵士がいる。彼女らの手紙の分析では、度合いやその他の動機に置いては十人十色であるものの、ナショナリズムに駆られた点と、女性としての解放を求めている点、そしてその手段として戦時に職を得て家を離れる機会を求めたことでも一致している。

女性と職業

どのような女性が職業人として従軍したのか。北部では、中産階級や一般の女性で、教師の経験があり、戦前に女性解放運動を含めて連帯活動をしていたもので、医師や看護師として戦地に赴いているものが多い。例えば、奴隷制廃止運動をしていたものは、看護師として戦地に行くことが、奴隷解放につなが

と考えていたし、家やコミュニティを離れて独立した仕事をすることは、女性解放の第一歩と考えてもいた。これに対して、南部の女性の場合、看護師として戦地に行っても、あくまでも愛国主義が家や家族を守ることとつながっていたと指摘するのがシルバーである [Silber, 2008]。

南北戦争は、男が戦争に取られることで社会の性差を一時的に曖昧にしたが、それが女性の社会進出を刺激した面もある。南部でも北部でも農村部では、中産階級の女性も一般の女性も、農場経営に直接関わらざるをえなくなったが、都市部では、労働者の女性のみならず、一般の女性の中にも、ボランティアではなく、仕事として支援物資の製造などの仕事をせざるを得なくなった女性も出てきた。なかでも貧しい者の中には比較的高給の仕事が魅力で戦地に向かうものが出てきた [Culpepper, 2005]。看護師の多くもそうであったが、料理人、洗濯人の場合は、ことにそうであった。

さて、コットは、女性の意識に関して、**feminism**, **female consciousness**, **communal consciousness** の三種類に分けて、歴史的実在としての女性の多様な意識への関心を説明しているが、その多様性は従軍の動機とも連動している。南北戦争前までは、女性の仕事は、女工を除けば教師しかなかったと言っても過言ではない。中産階級の女性は「家」の外でキャリアを作ることが難しくなっていたからである。医療のような専門職のみならず、商店の経営などにもライセンスという規制がかけられ始めると、例えば女性の管轄であった産婆の仕事も産科医の補助的なものになった。女性の教育は初等学校や、教師になるための中等学校を除けば、家庭教師に学び女性としての教養を身につけるのが通常であった。数少ないが教養を身につける女子専門学校もあったし、わずかの大学が共学を認めていなかったわけではないが、女性の高等教育機関としての大学、例えばセブン・シスターズが設立されたのは南北戦争後のことである。医師と言うと、南北戦争では数人の女性医師の活躍があるが [Schwartz ; Graf], 南北戦争前の、医師の養成大学は、女性を入学させなかったし、免許を取得することは、ほとんど不可能に近かった。ましてや、正式な医師として開業することは難しかった時代である。ウォーカー医師は、唯一認められた二

ニューヨーク州の大学を卒業したが、教養として認められた医師資格ではさしたる活躍の場はなかった。南北戦争はある意味で、こうした女性に実践の場を与えたともいえる [Silber, 2005]。

女性看護師

看護師はそうした仕事の一つで、南北戦争を契機に成立したもので、教師に次いで女性に特化した専門職とされた。もっとも、南北戦争が勃発したころは、教師と同じく「コミュニティの母」的な扱いであった。ディックスは衛生委員会の統括官として、看護師募集に当たって規定を作っている。1863 年になると人数と専門性の必要から、その採用はそれぞれの医者裁量に任せられることになり、技術を習得した若い女性が採用されるようになるが [Silber]、当初の規定では負傷者に対して母のような対応が求められていた。

看護師は一般に南軍・北軍両方で、5000 人はいたとされる。看護師は前線の野戦病院から都市部の拠点病院で働いたものまで、正式雇用のもので、ボランティアのもの、一時雇いのものと様々であるので、記録に残っていないもの、複数の職業に就いていたものなどを加えると、『南北戦争女性事典』が西部も含めて少なくとも 2 万人はいたと示す数値のほうが近いのかもしれない [Harper]。具体的に一般の看護師を知るには、ホルランドの *Mary Gardner, Our Army Nurses* が有益である [Holland, 2009]。これは約 100 名あまりの看護師を兵士の記憶から纏めたもので、情報は手紙の長さによって差があるものの、北部の様々な立場の看護師が記されている。

著名な看護師の指導者としては、衛生委員会の統括であったドロシー・ディックスに関する研究、例えば *Stranger and Traveler* は、彼女の社会改革者像を浮かび上がらせる [Wilson]。また、連邦の特許局の職員で、南北戦争の時には従軍看護師として戦地で活躍したアメリカ赤十字の創始者クララ・バートンを扱ったものや [Pryor; Oates]、先述のリバモアについての研究も得難い [Venet]。リバモアには、北軍での 4 年間の経験を 1887 年に発行した自伝もあり、それには、家庭、病院、駐屯地、そして戦線での看護という副題が添

えられているように、戦地での実態が明示されている [Livemore]。

これ以外に史料的な価値が高く、客観的な記述としてされるものでは、オルコットの *Hospital Sketches* がある [Alcott]。首都の連邦の病院での 6 カ月の看護師経験が残されているが、「男性であつたら兵士として従軍したのに」と言う彼女の北部人としての愛国心が看護師の道を選ばせたことが分かる。また、彼女は、病院の記述を通して、女性の役割、そして戦争と死の現実への問いかけをしている [Fahs]。南軍の場合では、ケート・カミングズの日記が、総合的で客観性の高いものである。南部への忠誠心から看護師として志願し、実際に 1862 年から戦争の終結までシャイローなどの南軍の前線で戦った戦争の記録である [Harwell]。南軍の立場から見ることができる史料として有用であるのみならず、戦場や野戦病院での悲惨さを前にして、冷静に国家の命運を見つめる一女性の姿が印象的である。

一般の看護師や女性医師の従軍の動機についても、家に書き送った手紙や日記が残されている。こうした日記などから様々な医師や看護師の声を拾って、野戦病院や駐屯地の悲惨な状況を描いているものに *In Hospital and Camp* がある [Straubing]。これ以外には看護師ハリエット・イトンの日記を扱った *This Birth Place of Souls* や [Schultz, 2011], ハナ・ロープスの日記や手紙 [Brumgardt], コーネリア・ハンコックの *Letters of 1863-1865* などがあるが [Jaquette], 今後こうした日記がますます発刊されることが待たれる。

女性兵士

南北戦争では、前線でスパイとして活躍した女性たちが注目される。もっとも彼女たちはスパイ活動だけをしたというよりも、戦地で看護師や医師やその他の仕事をしていて女性が敵地の情報を得る活動もしたと言った方が適切である [Segun]。家庭を守っている場合でも敵軍の兵士から密かに情報を得たりした場合も取り上げられている。さらに、慰問中に女優がスパイ活動をしたこともある。もっとも、一度限りのものもいたし、より高度なスパイ活動をして

いた者もいた [Blackman]。地下鉄道で知られる、タブマンが、南北戦争中は看護師、コックの仕事とともに、スパイ活動をしているのは周知のことである。

しかし、女性スパイ以上に特異な存在は女性兵士である。女性兵士は、独立戦争の時に活躍した「モリー・ピッチャー」のように、アメリカ史でもそれまで存在していなかったわけではない。しかし、女性是不完全で兵士となりえないとされた社会では、正式には動員されなかったし、私的にも許容されなかった。だが、南北戦争には、南北で 1000 人ぐらいの女性が男装をして銃を持って、従軍したとされている [Blanton]。もっとも、サラ・エドモンドやロレータ・ヴェラスケスなど、自伝を残している者はその存在は確認されているが、それ以外の女性兵士に関してはほとんど史料が無い。女性兵士は、除隊後、自ら告白したものを除いて、負傷したり、死亡したりした場合に判明したものがほとんどであるからである。また、男名で登録されていることも、判明をより難しくしている [Silvey]。数値は、新聞や兵士の手紙などの他に、軍の **Adjutant General's Office** 資料に残る入隊・除隊記録、恩給の記録から女性兵士の痕跡を探してのものである。

異装という点では、南北戦争前でも、選挙の時に男装した女性が投票しようとして逮捕されたケースがあるが、南北戦争と言う国家の危機の時に、男性と同じになることで愛国心を示そうとした女性たちが数多く存在したことは、当時の女性のアイデンティティを知る上で無視できない事実である。例えば、ここでは、比較的好く知られているものの場合を取り上げておきたいが、サラ・エマ・エドモンドの場合は、自らの *Memoirs of a Soldier Nurse, and Spy* で、北軍の兵士フランクリン・トンプソンとして活躍し、時には看護師やスパイもしていたことを書き記している [Edmonds]。彼女については、ポートレートも残されているし、副題に冒険譚とされているように、戦争への積極的な参加と自立の意志も見える。 *Where Duty Calls the Story* [Segun] や *The Mysterious Private Thompson* などの研究書もあり [Gansler]、多才な才能を持つ人物であったことが指摘されている。もう一人、比較的好く知られてい

るのが、キューバ系のロレータ・ヴェラスケスで、*The Woman in Battle* で、ハリー・ビューフォード中尉と名乗って、夫とともに南軍の義勇兵として戦地を巡回していたことを記している [VelazQues]。脚色が多く世間受けを狙ったものとされるので史料的价值は低いものの、南軍の史料としては一概に否定できない面がある。

本人の著作はないが、*She Went to the Field* は、イリノイの第 95 連帯で活躍したアイルランド系の女性ジェニー・ホッジャー、男性名アルバート・キャシアーを取り上げている [Tsui]。彼女は除隊後も男性で通し、養老院で死亡した時に判明したという特異なケースではある。彼女の他に、この本は、ミネソタの連隊で活躍したフランシス・クレイトンも取り上げているが、彼女はフランシス・クラーリンと名乗り、夫とともに従軍し、夫が死亡し自らも負傷する 1862 年の冬まで、激戦地で戦った女性である。身体能力が優れていて、数々の武勲をたてていたから、負傷するまで女性であることが見破られなかったとされる。女性選挙権論の運動家たちが称賛したことで、記録が残された場合である。さらに、この *She Went to the Field* は北軍の第 153 連隊のリオン・ウェイクマンと名乗った、サラ・ロゼッタ・ウェイクマンについても触れているが、彼女に関しては他に *An Uncommon Soldier* があり詳しい [Burgess]。その他、看護師や他の職業を含めて総合的な叙述では、*Women on the Civil War Battlefield* [Hall], *All the Daring of the Soldier* があり [Leonard]、黒人の女性兵士に関する記述や一般の黒人女性の存在を示唆する記述は得難い。

さて、先述の看護師リバモアが、性の逸脱が不道德であると述べているように [Livemore]、女性兵士は、当時も、その後も長く偏見から逃れることは難しかった。また、南北戦争直後に、メディアでセンセーショナルに取り上げられたことも彼女らを正確に捉えることを難しくしてきた。戦地で性を隠すことは困難であったのに、なぜ彼女たちは兵士となったのかについては、*They Fought like Demons* が参考になる [Blanton, Cook]。彼女たちは一人で従軍している場合もあるが、夫や婚約者と一緒に参加しているものも多い。それに

は、長く離れているよりも一緒に戦場にいる方を選んだとか、その他興味本位的な理由も述べられているが、それらだけでは十分ではない。経済的にしろ、政治的にしろ、自分を試してみたいところがあったようである。男性と同じ様に従軍して愛国心を示すことで、性の解放も求めた女性がいたことでは、看護師の場合と共通性を持つと指摘できる。

お わ り に

南北戦争の目的を北部が南部を同じ国家的な政治経済的システムに組み込むことであったとするならば、全体としては、北部の女性は北部的価値観の伝道によって国内植民地化に加担したと言える。しかし、北部の女性も南部の女性も、積極的に南北戦争に従事し、奴隷制と人種問題、経済的政治的統一の問題に答えを出すことで、自らの解放を求めていることが理解される。

ここでは、南北戦争が女性のありように与えた影響を知るために、二つの仮説を提示しておきたい。まず第1に、女性の特権分野であった慈善や社会改革は、南北戦争時に、官僚制にからみとられ、組織化され、全体社会を基盤とするものに転換していくことになったが、南北戦争期に登場した新しい女性たちは、男性と協力しながら、この公的部分で政治力を発揮し、より専門的で効率的な連帯の運動をなそうとした。しかし、全面的に男性社会にからみとられたわけではなかった。従来独自の女性の政治文化に基づく自主性を維持しえたからで、それは道徳改革に基づく伝統的な地域の運動ネットワークを中央に組織化しながらも、一般の女性たちや労働者階級の女性たちとの階級的横断的な関係のある程度維持しえたからである。

第2に、南北戦争に従軍した女性兵士、特に看護師は女性の仕事として特化され、女性の解放の象徴的なものとなったが、やがてそれは医師の補助的仕事として定着する。かつて「世間」にあった男性の領域と女性の領域の主従関係は、南北戦争で女性が活躍することで「外界」に進出することで変容を見せるが、やがて同じ主従関係が「外界」にも拡大されて、新たなジェンダー秩序

として定着することとなった。ジェンダー構造に基づく排他的な他者像についても、むしろ強化されていくことになった。

この二つの相矛盾するかに見える仮説を解き明かすことで、19世紀的な女性の連帯活動の歴史的な評価が定まるだろう。

参考文献

- Alcott, Louisa May, *Hospital Sketches* (Boston, 1863)
- Anderson, John, *The Journal of Kate Stone, 1861–1868* (Louisiana State University Press, 1955, 2010)
- Attie, Jeanie, *Patriotic Toil : Northern Women and the American Civil War* (Cornell University Press, 1998)
- Baird, Nancy Disher (ed.), *Josie Underwood's Civil War Diary* (Kentucky University Press, 2009)
- Berlin, Jean V. (ed.), *A Confederate Nurse : The Diary of Ada W. Bacot, 1860–1863* (South Carolina University Press, 1994)
- Blackman, Ann, *The True Story of Civil War Spy : Wild Rose* (New York, 2005)
- Blanton, Deanne, and Lauren M. Cook, *They Fought like Demons : Women Soldiers in the Civil War* (New York, 2002)
- Brumgardt, John R. (ed.), *Civil War Nurse : The Diary and Letters of Hannah Ropes* (Tennessee University Press, 1980)
- Burgess, *An Uncommon Soldier : The Civil War Letters of Sarah Rosetta Wakeman, Alias Pvt. Lyons Wakeman, 153rd Regiment, New York State Volunteers, 1862–1864* (Oxford University Press, 1994)
- Clinton, Catherine, *The Other Civil War : American Women in the Nineteenth Century* (New York, 1992, 1999)
- Clinton, Catherine, and Nina Silber (eds.), *Battle Scars : Gender and Sexuality in the American Civil War* (Oxford University Press, 2006)
- . *Divided Houses : Gender and the Civil War* (Oxford University Press, 1992)
- Cott, Nancy F., *Public Vows : A History of Marriage and the Nation* (Harvard University Press, 2000)
- Creighton, Margaret S., *The Colors of Courage : Gettysburg's Forgotten History, Immigrants, Women, and African Americans in the Civil War's Defining Battle* (New York, 2005)

- Culpepper, Marilyn M., *The Trials and Triumphs : The Women of the American Civil War* (Michigan State University Press, 1991)
- . *Women of the Civil War South : Personal Accounts from Diaries, Letters and Postwar Reminiscences* (NC, 2003)
- Edmonds, Sarah Emma, *Memoirs of a Soldier Nurse, and Spy : A Woman's Adventures in the Union Army* (Northern Illinois University Press, 1865, 1999)
- Edwards, Laura F., *Scarlett Doesn't Live Here Anymore : Southern Women in the Civil War Era* (Illinois University Press, 2000)
- Fahs, Alice (ed.), *Hospital Sketches by Louisa May Alcott* (Boston, 2004)
- Gansler, Laura Leedy, *The Mysterious Private Thompson : The Double Life of Sarah Emma Edmonds, Civil War Soldier* (Nebraska University Press, 2005)
- Farmerkaiser, Mary, *Freedwomen and The Freedmen's Bureau : Race, Gender, and Public Policy In The Age of Emancipation* (Fordam University Press, 2010)
- Fitzgerald, Michael W., *Union League Movement in the Deep South : Politics and Agricultural Change During Reconstruction*, Louisiana State University Press, 1989)
- Fone Eric, *Politics and Ideology in the Age of the Civil War* (Oxford University Press, 1980)
- Formisano, Ronald P., "The "Party Period" Revisited," *The Journal of American History*, 86 (June, 1999), 93–120
- Frank, Lisa Tendricch, *Women in the American Civil War*, 2 vols. (Santa Barbara, 2008)
- Frankwell, Noralee, *Freedom's Women : Black Women and Families in Civil War Mississippi* (Indiana University Press, 1999)
- Giesberg, Judith Ann, *Civil War Sisterhood : The U.S. Sanitary Commission and Women's Politics in Transition*, (Northeastern University Press, 2000)
- . *Army at Home : Women and the Civil War on the Northern Home Front* (North Carolina University Press, 2009)
- Ginzberg, Lori, D., *Women in Antebellum Reform* (Illinois, 2000)
- . *Women and the Work of Benevolence : Morality, Politics, and Class in the 19th Century United States* (Yale University Press, 1990)
- Goldstein, Joshua S., *War and Gender : How Gender Shapes the War System and Vice Versa* (Cambridge University Press, 2001)

- Graf, Mercedes, *A Woman of Honor : Dr. Walker and the Civil War* (Philadelphia, 2001)
- Gwin, Minrose C. (ed.), *A Woman's Civil War : A Diary with Reminiscences of the War, From March 1862* (Wisconsin University Press, 1992)
- Hall, Richard H., *Women on the Civil War Battlefield* (2006)
- Harper, Judith E., *Women during the Civil War : An Encyclopedia* (New York, 2007)
- Harwell, Richard Barksdale (ed.), *Kate : The Journal of a Confederate Nurse* (Louisiana State University Press, 1959, 2010)
- Holland, Mary Gardner, *Our Army Nurses : Stories from Women in the Civil War* (Minnesota, 2009)
- Hunter, Tera W., *To Joy My Freedom : Southern Black Women's Lives and Labors after the Civil War* (Harvard University Press, 1997)
- Isenberg, Nancy, *Sex and Citizenship in Antebellum America* (North Carolina University Press, 1998)
- Jaquette, (ed.), *Letters of a Civil War Nurse : Cornelia Hancock, 1863-1865* (Nebraska University Press, 1998)
- Johnson James H. (ed.), *The Recollections of Margaret Cabell Brown Loughborough : A Southern Woman's Memories of Richmond, VA and Washington, DC* (Maryland, 2010)
- Larson, Rebecca D. *White Roses : Stories of Civil War Nurses* (Gettysburg, PA, 1997)
- Livemore, Mary A., *My Story of the War : A Woman's Narrative of Four Years Personal Experience as Nurse in the Union Army, and in Relief Work at Home, in Hospitals, Camps, and at the Front, During the War of the Rebellion* (New York, 1887, 1995)
- Maher, Sis. Mary D., *To Bind up the Wounds : Catholic Sister Nurses in the U.S. Civil War* (Louisiana State University Press, 1989)
- Massey, Mary Elizabeth, *Bonnet Brigades American Women and the Civil War* (NY, 1966)
- Maxwell, William Quentin, *Lincoln's Fifth Wheel : The Political History of the U. S. Sanitary Commission* (NY, 1956)
- McDewitt, Theresa, *Women and the American Civil War* (Connecticut, 2003)
- Middleton, Lee Taylor. *Hearts Of Fire : Soldier Women of the Civil War* (NC, 1993)
- Mitchell, Reed, *Civil War Soldiers* (Penguin Books, 1997, 1988)

- Moore, Frank. *Women of the War* (Hartford, 1866)
- Oates, Stephen B., *A Woman of Valor : Clara Barton and the Civil War* (New York, 1994)
- Ott Victoria, E., *Confederate Daughters : Coming of Age during the Civil War* (Southern Illinois University Press, 2008)
- Pryor, Elizabeth Brown, *Clara Barton : Professional Angel* (Pennsylvania University Press, 1984)
- Rable, George C., *Civil Wars : Women and the Crisis of Southern Nationalism* (Illinois University Press, 1989)
- Randall, James and Donald, David, *The Civil War and the Reconstruction* (New York, 2000, 1969)
- Robertson, James, *Solidiers Blue and Gray* (University of South Carolina Press, 1998)
- Ryan, Mary P. *Civic Wars : Democracy and Public Life in the American City during the Nineteenth Century* (CA, 1997)
- Reilly, Wayne E., *Sarah Jane Foster : Teacher of the Freedmen : A Diary and Letters* (Virginia University Press, 1990)
- Saxton, Alexander, *The Rise and Fall of the White Republic* (NY, 1990)
- Schultz, Jane E. (ed.), *This Birth Place of Souls : The Civil War Nursing Diary of Harriet Eaton* (Oxford University Press, 2011)
- Schwartz, Gerald (ed.), *A Woman Doctor's Civil War : Esther Hill Hawks' Diary* (South Carolina University Press, 1984)
- Segun, Marilyn, *Where Duty Calls the Story of Sarah Emma Edmonds : Soldier and Spy in the Union Army* (Boston, 1999)
- Silber, Nina, *Gender and the Sectional Conflict* (North Carolina University Press, 2008)
- Smith, John D. and William Cooper, Jr. (eds.) *A Union Woman in Civil War : Kentucky : The Diary of Frances Peter*, (Kentucky University Press, 2000)
- Straubing, Harold Elk (ed.), *In Hospital and Camp : The Civil War through the Eyes of Its Doctors and Nurses* (Philadelphia, 1993)
- Taylor, Susie K., *Reminiscences of My Life in Camp* (Georgia University Press, 2003)
- Tsui, Bonnie, *She Went to the Field : Women Soldiers of the Civil War* (Connecticut, 2006)
- Velazquez, Loreta Janeta, *The Woman in Battle : The Civil War Narrative of Loreta Velazques, Cuban Woman and Confederate Soldier* (Wisconsin

University Press, 1876, 2003)

Venet, Wendy H., *A Strong-Minded Woman : The Life of Mary A. Livermore*
(Massachusetts University Press, Amherst 2005)

Vinovskis, Maris A. *Toward a Social History of the American Civil War :
Exploratory Essays* (Cambridge University Press, 1990)

White, Lee A., *The Civil War as a Crisis in Gender : Augusta, Georgia, 1860-
1890* (George University Press, 1995)

Wiebe, Robert H., *Self-Rule : A Cultural History of American Democracy*
(Illionois, 1995)

Wiley, Bell, *Common Soldier of the Civil War* (1973)

Wilson, Dorothy Clarke. *Stranger and Traveler : The Story of Dorothea Dix,
American Reformer* (Boston, 1975)